地方における明治末・大正の銀行建築の意匠
-愛知県尾張地方を中心とした事例的考察-

溝口　正人

キーワード：洋風建築・銀行・塗籠造・意匠・尾張・愛知県

1．地方における銀行建築考察の視点と焦点

幕末から建造され始めた建築には、従前の技術に立脚しながら西欧の建築意匠、いわゆる洋風意匠を取り入れた和洋折衷ともいうべき構成のものが多く、この種の近代洋風建築については、近代成立期の日本の文化的背景を表す文化財としての価値が評価されている。ただし地方における事例の多くは地方の工匠によるものであるから、そこに認められるデザイン的特質も、その地方の技術的、社会的背景に則って理解すべきであり、また地方における近代とは何かといった視点に立脚したデザイン的特質の分析が、近代洋風建築の保存活用に繋がる歴史的価値の評価には不可欠である。

一方、近代以降、国家建設に貢献すべき学問としての「建築学」の確立とともに、特権的な存在であった工部大学校・帝国大学卒業者は、西欧を範とした、あるべき「正しい建築」の理解と浸透こそが、自らの使命であると信じて疑わなかった。よって新たな時代を迎えて切実な設計需要が存在した地方の状況は、まったく視野の外にあったといってよい。

工部大学校出身者によって明治19年（1886）に設立された造家学会は、明治30年（1897）に「建築学会」と改称する。それから6年後となる明治36年、日本建築学会の機関誌『建築雑誌』に掲載された、塚本靖（帝国大学卒）の「過去三年間日本に於ける建築談論の批評」（『建築雑誌』第194号,明治36年3月）と題する発言は、多くの洋風建築が地方で建てられている当時の状況に対する学会的な理解を示すものとして興味深い。

塚本は、「西洋の建築学を修められた人でない建築家或は素人の造った細小の「でも西洋建築」即田舎の郡役所とか小学校とかは素より別問題として、東京に建っている西洋の大建築(？)学士とかの建てた建築については一般に様式の一致位はある様に見受けます。」とする。塚本にとって、「様式の一致」が建築にあるべき最低限の原則なのであり、「西洋の建築学を修め」た人、すなわち学士はその原則を踏まえているが、そうでない人は原則を踏まえない。ゆえに「田舎の郡役所とか小学校」は「でも西洋建築」として評価の対象外とした。しかしながら塚本が切り捨てた「でも西洋建築」が、地方において近代の到来をその存在で示した圧倒的多数であったことは、いうまでもない。無視できない存在であるからこその塚本の発言と理解することも可能である。

近代に入り洋風意匠が採用された建物には、官庁、学校といった近代国家に関する公的施設に加え、経済活動に関わる商業建築や、邸宅がある。おそらく公的施設よりも商業建築が、実数においては多数であっただろう。そして商業建築には、その存在を通して事業体の商業活動が一般の人々に受け入れられる必要性があり、国家の施策を表象する公共施設に比べて、意匠的にも理解しやすい形式が採用される必要がある。この点については、なにも明治時代に限ったことではなく、現代においても同様な傾向が指摘できる。

塚本の発言に示されるように、近代以前の国家の施設では、社会的に上位にある国家から国民への宣言としてトップダウンのベクトルが働くとみることが可能である。普遍的にみ

るならば、国立競技場の建て替えプロジェクトも、まさにこのベクトルの発露の顕著な事例といえるのかもしれない。対照的に商業建築は、良くも悪くも民意に応ずる、あるいは言葉を悪くするならば迎合する必要があり、ボトムアップのベクトルが生じる。もちろんこのようなベクトルの相違がそのままダイレクトに建築の意匠に反映されるほど、単純な構図が描けるわけではないが、前者のベクトルに注目しがちな歴史研究で、後者のベクトルを研究対象とする意義は認めることが可能である。つまり多数派である地方の商業建築の建築的動向の把握は、都と鄙、官と民といった軸を踏まえて立体的な近代建築史を構築する上で必要不可欠であるといえる。そしてその前提として、具体的な事例に基づく実態把握がなされなければならないだろう。

そこで以下の本報告では、商業建築のなかでも都市における洋風意匠導入の契機となった新たな建築種である銀行建築を分析の対象とし、そこに採用された意匠について事例的に考察する。

銀行は、政府が明治 6 年に第一国立銀行を開業させたのを稿矢として、明治から大正時代にかけて全国各地に数多く設立された。明治26年8月の貯蓄銀行条例発布を経て、地方では私立銀行の設立が急増したとされる 1)。こうして設立された地方の銀行では、塗籠造（用語については後述）の事例が多く報告されている 2)。この種の銀行建築の設計には、基本的に民間の工匠、つまり塚本の分類では「素人」に属する人が関わっていたと考えられるが、意匠的には内観が洋風で構成されるのに対して、外観は伝統的な意匠・技法を採用するといった和洋の意匠の混在が特徴となる。

この特徴については、本稿でも取り上げる旧稲橋銀行足助支店を事例として、西澤泰彦氏が整理、指摘している 3)。西澤は、「木造塗籠や土蔵造といった日本の伝統的な建築様式・技術が用いられた背景」として、以下の3点をあげる。まず業種の類似から「銀行のイメージが両替商の建物ではよく見られた木造塗籠の形態になった」こと、「耐火性能を向上させることは、それだけ社会的信用を保つことにつながっていた」ため、「外部に木部が露出しない耐火建築」となったこと、「地方都市において洋風建築の建設に携わることのできる技術者や職人が不足していたこと」、の 3 点である。西澤の指摘は枠組みとして概ね首肯しうるものであろう。問題は、このような状況がいつまで続くのかである。

このような塗籠造の銀行建築は、明治の終わりまでは建設されるが、大正時代に入ると本格的な洋風意匠が選択されるようになり建設されなくなるとされている 4)。しかし愛知県の近代建築に関する従来の研究では、銀行建築の意匠に関する実態把握は必ずしも十分に進んでいるとはいえない。また西澤が指摘するこの形式の採用の要因についても、果たしていつの段階のどのような範囲で有効性を持ちうるか、実例に則して検証する必要がある。そこでこのような時代的変遷が愛知県に敷衍されうるものか、現存遺構に即して確認することが本稿の目的である。

愛知県下の近代建築の遺構に関する悉皆的な調査の成果は『日本近代建築総覧』（日本建築学会編 1980、以後新版 1983、追補 1998.6）、『愛知県の近代化遺産』（愛知県教育委員会 2005）、『愛知県の近代和風建築』（同 2007）にまとめられている。本報告はこれら調査による知見を踏まえながら、独自に整理した資料をもとに意匠的な特徴について分析することとしたい。

なお本稿で取り上げる形式を初田亨は「土蔵造」と記すが、開口部は土蔵窓に限定されない。また西澤は「木造塗籠」と「土蔵造」に分類するが、1 階と 2 階で軸部の処理が相違する事例もあって、厳密に分類できない場合もある。そこで本稿では、軸部の素地を顕さないで塗籠めの大壁とする形式の事例をひろく塗籠造と記すこととしたい。この中には、木舞を外面に打ち付けて外壁面を平滑に仕上げ、開口部を土蔵扉とする土蔵造と、漆喰塗りとしながらも軸部の形状を造り出す塗籠仕上げを含むものとする。意匠的には両者の相違点が、町家にみられるような関東と関西といった地理的な相違、ひいては時代的な相違に基づくと考えられる部分もあるが、その点については今後の検討課題としたい。

２．現存遺構の構成と意匠

愛知県における最初の銀行として明治 9 年に第十一国立銀行が開業、同年に三井銀行名古屋支店が開設され、その他の地域と同様に、明治中期頃から私立銀行が数多く開業し、各地に支店が設立されている。

各地域で建設された銀行建築であるが、多くは取り壊されており、現存する遺構は極めて少ない。本稿では、明治・大正時代の写真帖に掲載された事例と比較するため、筆者が確認した尾張地区の現存遺構を中心に、比較検討のため、周辺事例も加えて考察する。尾張地区の事例としては、旧加茂郡銀行羽黒支店（犬山市、明治 40 年代、現小弓の庄）、旧村瀬銀行犬山支店（犬山市、大正２年）、旧村瀬銀行萩原支店（一宮市、大正８年）、旧愛知銀行津島支店（津島市、明治40-43 年）の４例、その他では、犬山北隣の旧美濃太田宿にある旧十六銀行太田支店（美濃加茂市、明治 40 年）、旧稲橋銀行足助支店（豊田市、大正元年、現中馬館、県指定）の２例で現状の確認調査を行った。旧加茂郡銀行羽黒支店と旧稲橋銀行足助支店の 2 例は自治体所有となって保存されている。以下、これら６例について建設年代順にデザイン的特徴を整理する。

ア）旧十六銀行太田支店（図１）

明治９年に設立された十六銀行（本店は岐阜）の支店として、明治 31 年に上町の脇本陣東側に開設された太田支店は、明治 40 年に現在の位置に移転した。現存する建物は，この移転時のものとされる 5)。建て替えの記録もなく形式技法からみて矛盾はない。現在は個人宅として用いられており、外観は１階廻りで，入口廻りの改変、窓のアルミサッシへの取り替えがなされ、旧状は不明な部分が多い。一方、２階や屋根廻りは良く旧状を残しており、「銀」の字を浮き彫りにした鬼瓦を棟にいただく。木造 2 階建、塗籠造、寄棟造妻入の建物で、２階の軒は出桁で受ける。後述する旧愛知銀行津島支店と同じく町家に準じたツシ２階状の断面構成で、たちは高くない。２階壁面は軸部を強調して漆喰塗り仕上げとしており、開口上下で長押を通し、正面では両脇間は壁、残りは窓として丸棒の格子を嵌め込む。個人宅のため内部は未調査であるが、美濃加茂市教育委員会に収集されている古写真によれば、内部の営業室は全体が吹抜けであったことがわかる。

図１ 旧十六銀行太田支店外観

図２ 旧加茂郡銀行羽黒支店外観

イ）旧加茂郡銀行羽黒支店（小弓の庄）（図２）

明治 43 年に設立された加茂郡銀行の支店である。平成 9 年の解体修理に際して発見された鬼瓦のヘラ書により明治 40 年代の建造と考えられている 6)。木造２階建、塗籠造、寄棟造平入の建物で、壁面には蛇腹の繰形とコーナーストーン、窓廻りにはペディメントといった洋風装飾が左官仕事で施され、窓は両開きのガラス窓、外観の基本が洋風でまとめられる。正面玄関庇の屋根は唐破風として懸魚を設けるもの

の洋風の落束、軒下飾りがみられ、和洋の意匠が断片的に混在する。内部は、客溜と営業室上部が吹抜けており、2階床高さにギャラリーが廻る。2階奥の広間と吹抜けとの間仕切は引違戸で上部には欄間があり、外観同様に吹抜廻りでも和洋の意匠が混在している。

ウ）旧愛知銀行津島支店（図３）

印刷会社の作業場として利用されている。『愛知銀行四十六年史』（昭和 19 年刊）に掲載された支店の開設、廃止状況によれば、明治 40 年から 43 年の間に開設されたことになり、現地のヒアリング調査でも建設年代は明治後期とのことであった。支店開設時期を建設年代とみてよい。木造 2 階建、塗籠造、寄棟造妻入の建物で、2階軒は出桁で受ける（図３）。上述した旧十六銀行太田支店と同じく町家に準じたツシ２階状の断面構成で、たちは高くない。屋根は寄棟であるが、前面半間の出を葺き下ろして納めるため、たちの低さと相まって正面外観は平入のように見える。1 階の窓、2 階の窓には、丸棒の格子を窓枠に嵌め込む 7)。窓上下に長押状の材を通すが、正面両脇間は戸袋状に壁面を前に出している点で旧十六銀行太田支店とは異なる。1階正面入口には、モルタルの戸枠造り出しが残り、1階開口部の腰部分は、洗い出しの腰張りとする。短冊状の敷地いっぱいに建つ奥行きの深い建物であるが、内部は全体が吹抜けとなっていて、天井は全面を格天井としている。前方壁面にギャラリーが残る。

エ）旧稲橋銀行足助支店（中馬館）（図４）

大正元年の開業に合わせて新規に建造された 8)。木造 2 階建、塗籠造、切妻造平入の建物で、2階の軒を出桁でうける。前面下屋庇の両側面には袖壁を建ち上げ、1、2 階開口部は枠廻りを太く虫籠窓状に仕上げて、金属製(現在は木製)の太い格子竪子を窓枠に嵌め込む。正面入口の戸枠、1階開口部の腰は人造石研ぎ出しとする。内部は、通りに面して客溜、カウンターを境にして奥が営業室で、客溜と営業室前方の上部は吹抜けており、2階にギャラリーが廻り、天井は格天井とする。なお『足助町案内』（明治 44 年刊）に掲載される旧支店は、切妻造妻入り、土蔵造の町家風の建物である。

オ）旧村瀬銀行犬山支店（図５）

本町通り沿いの中本町に位置する。実測調査で発見された棟札により大正２年 12 月 29 日上棟と確定した。木造２階建、塗籠造、寄棟造妻入の建物で、2階の軒を出桁でうける。周辺の町家に比べて極めてたちの高い構成である。現状は内外観とも改変が大きいが、別稿で述べたとおり 9)、改修工事に際して痕跡調査を実施し、前面２階に関しては、後述、旧村瀬銀行萩原支店と同じく、いわゆるポツ窓の構成で、大壁で納める外観であったことが明らかとなった。前面１階の

図３ 旧愛知銀行津島支店

図４ 旧稲橋銀行足助支店

開口は不明である。内部に関しては、2階に洋間が設けられていたことが、現存天井痕跡からわかる。通りに面する東前面と後半部南半が営業室の吹抜けであったと考えられる。前面外観は、痕跡に基づいて平成22年に復原的な改修が施されている。

カ）旧村瀬銀行萩原支店（図6）

美濃街道萩原宿の旧問屋場に隣接して大正 8 年に建造された 10)。木造2階建、塗籠造、寄棟造平入の建物で、2階軒を出桁でうける。1階前面は店舗として改造されて出入口廻りの旧状は不明であるが、下屋庇や2階開口など外観は当初の構成が残る。内部は、手前に客溜、カウンターを境にして奥に営業室がある。客溜よりも一段高い当初の営業室の床が残り、金庫室なども現存する。内部壁面に腰張りが廻り、客溜、営業室部分は吹抜けで西側を除く三方にギャラリーが廻る。内装、天井の白漆喰仕上げがそのまま残る。

以上、現存遺構の形態的特徴を整理したものが（表1）である。外観が塗籠造である点、内部は洋風の意匠を基調として吹抜がある点では共通するが、意匠的にはかなり多様である。外観において旧十六銀行太田支店、旧愛知銀行津島支店、旧稲橋銀行足助支店では洋風の意匠がほとんど存在せず、虫籠窓や格子、袖壁は、町家の形式を基本とする。旧村瀬銀行犬山支店、同萩原支店は、開口部に洋風意匠といえる上げ下げ窓や鎧戸を採用する。古写真で外観が確認できる村瀬銀行本店（明治 31 年開設。もと愛知起業銀行）、森上支店（祖父江町、建設年不明）も同様な寄棟造、ポツ窓の意匠である 11)。旧加茂郡銀行羽黒支店は洋風意匠を基調としている点で特異な事例となっている。

和洋の意匠が折衷された塗籠造の銀行建築は、前述の通り大正時代には姿を消していたと指摘されてきた。しかし現存する5事例にみられるように、明治40年代から大正初期にかけての愛知県においては、同様な意匠が依然として採用され続けていたことになる。

3．画像資料にみる銀行建築の意匠的な実態

現存遺構の特徴が同時代に敷衍されるものか、画像資料で確認される同時代の銀行と比較する。用いた資料は『愛知県写真帖』（明治43年3月発行）と『尾北写真画帖』（大正元年12月20日発行）である。この2冊の写真帳に確認でき

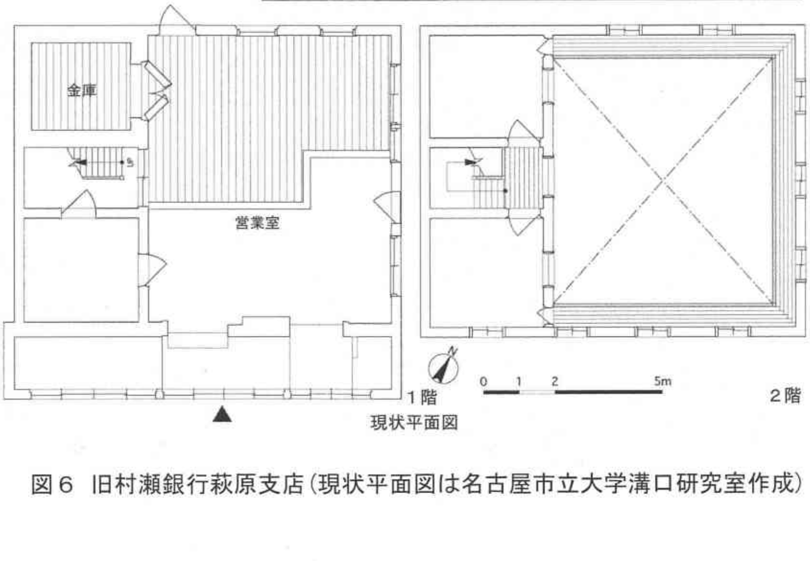

図5 旧村瀬銀行犬山支店（前面復原）

図6 旧村瀬銀行萩原支店（現状平面図は名古屋市立大学溝口研究室作成）

表1 現存遺構の形態的特徴

名称	建築年代	形式	屋根			壁		開口部	その他	
			屋根形状	妻・平	細部	壁面仕上	細部	開口部の建具	玄関庇	備考
旧十六銀行太田支店	明治40年	ツシ2階	寄棟	妻	出桁	塗籠造(軸部)	腰巻?	丸棒格子窓(硝子窓)	不明	吹抜(古写真)
旧加茂郡銀行羽黒支店	明治40年代	2階	寄棟	平	軒繰形	塗籠造(大壁)	軒蛇腹、腰巻石張り、隅石、胴蛇腹、	両開き戸、両開き窓、引違窓(硝子窓)	唐破風屋根	吹抜。窓装飾(ペディメント、持送)、落束、バージボード、持送、下魚。
旧愛知銀行津島支店	明治40-43年	ツシ2階	寄棟	妻	出桁	塗籠造(軸部)	腰巻	入口部分不明、丸棒格子窓(硝子窓)、虫籠窓	下屋庇	現状全面吹抜
旧稲橋銀行足助支店	明治44-大正元年	ツシ2階	切妻	平	出桁	塗籠造(大壁)	腰巻、下屋庇袖壁	両開き戸、丸棒格子窓(硝子窓)、虫籠窓	下屋庇	吹抜
旧村瀬銀行犬山支店	大正2年	2階	寄棟	妻	出桁	塗籠造(大壁)	腰巻	入口部分不明、上げ下げ窓、よろい戸(上引込み式)	不明	吹抜(痕跡)
旧村瀬銀行萩原支店	大正8年	2階	寄棟	平	出桁	塗籠造(大壁)	腰巻1階袖壁	入口部分不明、上げ下げ窓	下屋庇	吹抜

表2 写真帳に掲載された銀行建築の形態的特徴

書名	名称	形式	屋根			壁		開口部	その他	
			屋根形状	妻・平	細部	壁面仕上*	細部	開口部の建具	玄関庇	備考
愛知県写真帖 明43	尾三農工銀行	2階	寄棟	平	出桁?	塗籠造(大壁)	腰巻	両開き鎧戸、上げ下げ窓?	片流屋根,半円アーチ	
	明治銀行	2階	寄棟2棟	妻	軒蛇腹	塗籠造(大壁)	デンティル、腰巻	両開き鎧戸、上げ下げ窓	下屋庇切上	
	愛知銀行	ツシ2階	切妻	平	卯建	塗籠造(軸部)	1階腰巻	両開き戸(硝子戸)、上下長押・堅格子窓	下屋庇切上	町家形式(旧医者宅改造)
	名古屋銀行	ツシ2階	切妻	平	卯建	塗籠造(大壁)	1階腰巻	堅格子、虫籠窓	下屋庇	町家形式
尾北写真画帖 大正元	丹葉銀行古知野支店	ツシ2階	平入	平		真壁		堅格子窓、台格子		町家形式
	幼銀行	ツシ2階	平入	平		真壁、下見(側面)		引戸(格子戸)、台格子、堅格子窓		町家形式
	岩倉銀行	ツシ2階	平入	平		真壁、下見(側面)	駒寄	引戸、格子窓(?)		町家形式
	古知野銀行	2階	平入	平		塗籠造	腰巻	両開き戸、虫籠窓		
	丹葉銀行犬山支店	ツシ2階	平入	平		真壁、下見(側面)	腰巻	両開き戸、虫籠窓		町家(半軒分)現存
	丹葉銀行	ツシ2階	平入	平		塗籠造	駒寄、腰巻	引戸、堅格子窓	下屋庇(銅)	町家形式
	犬山銀行	ツシ2階	平入	平		塗籠造	腰巻、下屋庇袖壁	両開き戸(硝子戸)、虫籠窓		
	一宮銀行犬山支店	1階	寄棟	妻		西洋下見	軒蛇腹	上げ下げ窓、鉄格子(?)	入母屋屋根	窓上ペディメント、落束、軒蛇腹
	古知野銀行柏森支店	ツシ2階	平入	平		塗籠造	腰巻	引戸?、虫籠窓		町家形式
	村瀬銀行布袋支店	ツシ2階	平入	平		真壁	駒寄	引戸、連子格子?		町家形式、現存

*形式)ツシ2階:町家形式で1階に比べて2階階高が小さい形式をツシ2階と表示。1階階高が高いため、軒高が町家の本2階かそれ以上の場合もある。
*壁)真壁:写真で判断できない部分もあり、軸部を薄塗りしたいわゆる塗家造を含む可能性がある。

る計14棟の銀行建築の形態的特徴を現存遺構と同様に整理したものが（表2）である。

ア）『愛知県写真帖』12)

奥付によれば、愛知県協賛会によって編集され明治43年3月に発行されている。本書には、愛知県会議事堂や第十五師団司令部といった行政、軍事施設や、学校、工場、会社などが多数掲載されており、建築の意匠には、洋風が多く採用されていることが確認できる。掲載される銀行は、尾三農工銀行、愛知銀行、明治銀行、名古屋銀行の4例で、大場修の研究でも町家建築の視点から分析されている13)。尾三農工銀行（明治31年設立。**図7**）と明治銀行（明治29年設立。**図8**）は、ともに木造2階建、塗籠造、寄棟造の建物で、壁面は大壁、開口部は上げ下げ窓・両開きの鎧戸として壁面には腰巻を施す。外観は和洋の意匠が混在している。明治銀行は、軒蛇腹が設けられており軒下部分にデンティル（歯状帯装飾）がみられ、より洋風の意匠を意識した外観となっている。

一方、愛知銀行（**図9**）と名古屋銀行（**図10**）は、切妻造平入、軒高の高い大型の建物であるが、ツシ2階状の立面構成で、卯建のあるいわゆる町家形式の建物である。2階開口部が両行では相違しており、愛知銀行は上下に長押を通し、連子格子状に竪子を連続させる開口だが、名古屋銀行は正面両脇間を壁として以外を開口とし、開口枠を太く回した虫籠窓とする。

イ）『尾北写真画帖』14)

掲載される銀行は、丹葉銀行古知野支店、幼銀行江南支店、

図７ 尾三農工銀行

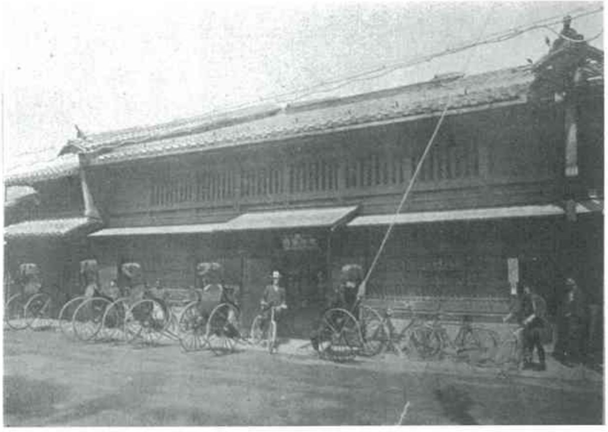

図９ 愛知銀行

図８ 明治銀行

図10 名古屋銀行

岩倉銀行（岩倉町）、古知野銀行（古知野町）、丹葉銀行犬山支店、丹葉銀行（布袋町）、犬山銀行（犬山町）、一宮銀行犬山支店、古知野銀行柏森支店、村瀬銀行布袋支店の10例である。

一宮銀行犬山支店（図 11）は、西洋下見板張り仕上げとする点で、確認される中では唯一の事例である。平屋建ではあるが隣接するツシ２階の町家(現存)よりも高い。軒蛇腹、開口部に上げ下げ窓とペディメント風の窓装飾を採用する。正面入口のペディメントを模した入母屋屋根、太短い落束は、擬洋風建築に通じる意匠といえる。

丹葉銀行古知野支店（図 12）、幼銀行江南支店（図 13）、岩倉銀行（図 14）、丹葉銀行（図 15）、村瀬銀行布袋支店（現存。図 16））の５例は、ツシ２階、切妻造平入の町家で、開口部には引戸、格子が設えられている。（図 17）、犬山銀行（図 18）、古知野銀行柏森支店（図 19）、古知野銀行（図 20）は切妻造平入、塗籠造の町家形式であるが、１階に腰巻を施し出入口を両開き戸とする。特に犬山銀行は、たちのかなり高い建物であることが、隣家との比較からわかる。

『尾北写真画帖』にみる銀行の建築意匠は、一宮銀行犬山支店を除いて平入屋根の町家形式の事例が確認でき、また町家形式では塗籠造形式（大壁）と軸部を外観意匠に用いた真壁形式（いわゆる塗屋造）の２種類がある。塗籠造の２階部分の窓では、窓枠を虫籠窓形式とする。犬山銀行の外観は現存する旧稲橋銀行足助支店と酷似している。

以上、写真帳にみられる銀行建築は、塗籠造や軸部を漆喰塗りとする町家建築の延長上に位置するといえるものがほとんどであり、塗籠造の場合、開口部は虫籠窓と上げ下げ窓の２種類が確認された。これは現存遺構と同様な振幅のなかに納まる意匠であり、現存遺構に示される傾向が決して特殊ではないことが、写真帳の事例から理解できる。

対照的に銀行に求められる堅牢さにそぐわないと認識されたためか、外壁を西洋下見板張りとする事例は一宮銀行犬

山支店1例に限られる。また旧加茂郡銀行羽黒支店のような塗籠造で擬洋風に準じる意匠は確認できず、改めてこの意匠が採用された経緯が問題となる。

一方、木造ツシ2階、切妻造平入、真壁、簓子下見板張りの外壁、連続する格子の意匠に特徴的な、純然たる町家形式を採用する事例も確認できる。この形式である旧愛知銀行は、医師住宅であった建物を改造したものであり、村瀬銀行布袋支店（現存）は近世以来の資本家村瀬家の居宅である 15)。このような町家形式の事例の中には、転用によるものも多かっただろう。

4．塗籠造の銀行建築の意匠的な特徴

愛知県において現存遺構と写真帳にみられた銀行建築には塗籠造が多く確認でき、開口部の意匠としては、単純な格子窓、虫籠窓を採用する事例、上げ下げ窓を採用する事例が確認できた。上げ下げ窓は、近代に導入された洋風意匠のひとつといえるが、名古屋においては明治銀行（明治29年開設）、村瀬銀行本店（明治 31 年開設）で寄棟造、塗籠造の構成とともに採用されており、銀行開設が相次ぐなかで県下の銀行建築に広まったものと考えられる。そして本稿でみたとおり塗籠造を採用する銀行建築は大正時代に至るまで確認できる。

近世末からの伝統的町家建築の変化と塗籠造りの浸透については別稿で述べたことがあるが 16)、広く都市建築

図 11 一宮銀行犬山支店

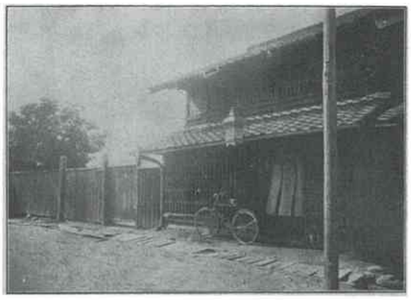

図 12 丹葉銀行古知野支店

図 13 幼銀行

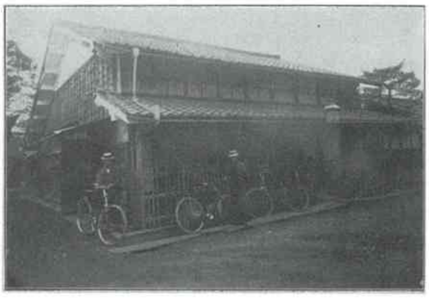

図 14 岩倉銀行

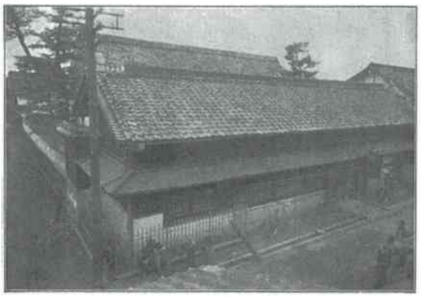

図 15 丹葉銀行

図 16 村瀬銀行

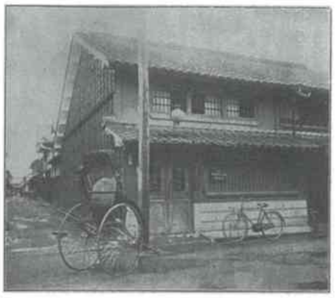

図 17 丹葉銀行犬山支店

図 18 犬山銀行

図 19 古知野銀行柏森支店

図 20 古知野銀行

に対象を広げたとき、塗籠造の町家建築の中にも、虫籠窓を採用する事例、土蔵扉を２階開口に採用する事例が確認できる。以上にみた銀行建築における意匠がどこまで一般的であったかは明確ではないが、こうしたデザイン的傾向が工匠による独自性の表れではなく、建築種を越えたある種の共通したイメージの存在によるものであることを示すものとして理解すべきように思われる。この点については、今後、稿を改めて論じることとしたい。

註記

1)『名古屋市史 産業編』、1915.8、pp.201-212

2) 初田亨「後ろ髪を引かれた世界」（初田亨、大川三雄、藤谷陽『近代和風建築』、建築知識 1992 所収）。各県の近代化遺産、近代和風調査報告書参照。なお初田は上記論文で「土蔵造」を用いている。

3)『愛知県史 別編 文化財１ 建造物・史跡』愛知県 2006、pp351-352

4) 前掲、初田亨論文、pp.94

5) 『美濃加茂市史』通史編、美濃加茂市 1980、pp776-777。『写真集 明治大正昭和美濃加茂 』美濃加茂写真集編集委員会 1986、高島博・大畑守道・横山住雄、他

6) 『小弓の庄 旧加茂郡銀行羽黒支店建物復原の概要』犬山市まちづくり推進課

7) 竪子は木製。戦中の供出により取り替えられた可能性がある。

8) 前掲愛知県史 pp351-352（西澤泰彦執筆）参照

9) 溝口正人・向口武志・柳澤宏江「旧村瀬銀行犬山支店の復原」日本建築学会東海支部研究報告集 48 号，2010.2。

10)『愛知県の近代和風建築』愛知県教育委員会 2007、pp142-143（溝口調査執筆）参照

11) 本店に関しては『ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 名古屋』国書刊行会 1979、森上支店に関しては『祖父江町 ふるさと今昔写真集』祖父江町 1985 参照

12)『愛知県写真帖』愛知県協賛会編集，明治 43 年３月発行

13) 大場修『近世近代町家建築史論』中央公論美術出版 2004，第 22 章

14) 正木貞弌編集，大正元年 12 月 20 日発行

15) 明治村に移築されている東松家住宅も、もと銀行であり、前面意匠が銀行建築としての特徴を示す点が長谷川良夫氏により指摘されている（『重要文化財（建造物）旧東松家住宅保存修理工事報告書』博物館明治村 2004）

16) 溝口正人「地方における建築の近代に関する素描」『芸術工学への誘いＸＩ』名古屋市立大学大学院芸術工学研究科編 2007、pp347-370

謝辞

資料収集にあたっては、建物所有者、関係自治体、現地調査では名古屋大学大学院准教授 西澤泰彦博士、名古屋市立大学大学院准教授 向口武志博士、現博物館明治村建築技師 柳澤宏江博士に多大な協力をたまわった。記して謝意を表す。

付 記

本稿は、溝口正人、向口武志、柳澤宏江「愛知県下における明治末・大正の銀行建築の意匠」（『日本建築学会東海支部研究報告集』第 49 号、2011.2、pp94-119。溝口執筆）の論述の一部をもとに、その後の遺構調査で確認した物件を加えて新たに書き改めたものである。科学研究費 基盤研究（Ａ）「被災・破損を起因とする建設の技術革新と建築様式に関する歴史的研究」（代表 藤井恵介）、科学研究費 基盤研究（C）「架構と意匠からみた地方の建築における「洋風」の浸透と持続ー濃尾地方を事例としてー」（代表 溝口正人）に基づく研究成果の一部である。